

蓑虫山人と彼の絵日記

蓑虫山人（1836～1900）は、14 歳で美濃の国（現在の岐阜県）の実家を離れ、48 年間日本中をさまよった放浪の画家でした。土岐源吾の名で生まれた彼は、放浪の生活スタイルと、ミノムシが背中に作る保護ケースに似た独特の蓑の蓑から、蓑虫山人として知られるようになりました。山人は、考古学、民間伝承、造園の研究を追求した多様な興味を持った人で、しばらくの間、彼は兵士として務めたことさえありました。しかし彼は、旅の途中で創作した絵によって最もよく知られております。特に宇佐地域の自然の風景、建築、日常生活、宗教行事を描いた彼の絵は歴史家にとって大きな価値があることが証明されています。

山人は 1864 年に宇佐へやって来て、地域を散策しながら 3 ヶ月を過ごしました。彼はこの地域にいる間、戦いで亡くなったかつての仲間のための記念碑を建てたと言われています。彼は絵日記を書き続け、広大な風景、有名な場所、宇佐周辺に住み、働いていた人々を描きました。その絵の多くは、当時の地域の風景と配置についての重要な見識を提供しています。たとえば、呉橋の北側から宇佐神宮を臨んだ絵には、今は存在していない弥勒寺とその仁王門が描かれています。

絵日記には、19 世紀後半に天皇に代わってお祈りやお供え物を捧げるために宇佐神宮へ向かってきた、珍しい勅使（天皇陛下の使者）の行列の描写も含まれています。このような勅使の訪問は、現在では 10 年ごとに行われ臨時奉幣祭として祝われるようになりましたが、山人の時代には 60 年に 1 回しか開催されなかったため、この視覚的な記録はさらに価値のあるものになりました。ある絵には宇佐神宮に続く道に沿って伸びる大きな行列が描かれ、別の絵には勅使が使用した神社の手水舎で自らを清めようと競う庶民たちが描かれています。

山人は宇佐を離れる前に、現地のある家族へ 2 冊の画集を贈りました。この冊子には、耶馬溪の峡谷や院内町、安心院町、中津市など、宇佐をはじめ大分県周辺で制作された絵が約 80 ページにわたって掲載されています。画集は、宇佐教育委員会から「蓑虫山人絵日記」として出版されました。呉橋の近くの看板は、山人のスケッチの 1 つを複製しており、150 年以上前の宇佐神宮とその周辺の様子が見られます。